

## — [コラム4] 自助グループや被害者団体の活動について —

## 当事者の会と歩んだ22年間

少年犯罪被害当事者の会 代表

武 るり子

私の息子孝和は、22年前、16歳の時、同じ16歳の見知らぬ少年たちにいわれのない因縁をつけられ、何度も謝っているにもかかわらず、追いかけれ一方的な暴力で殺されました。私は、自分の息子が、まさかこんなことで親より先に死んでしまうなど思ってもみませんでした。それまで私は少年犯罪のニュースを見ていても、かわいそうだなあとか大変だなあとか、他人事としてしか考えていなかったのです。

事件に合う前、当然、被害者は法律で守られていると思っていました。でも当時は、被害者のことを考えている法律や制度、相談窓口もありませんでした。警察や家庭裁判所に行っても、事件の内容や加害者の名前を、私たち親にすら教えてもらえなかったのです。理由は、たった一つ。「加害者が少年だから」でした。

息子が亡くなった原因が、けんかではなく一方的なリンチによる事件だと分かった時、主人は、私にこう言ったのです。

「俺たちは、もう見世物パンダになってもいいな。こんな理不尽なことがあってはいけない。言っていこう。言うからには、すべてをさらけ出さないとはいえない。その覚悟は、あるか」と。私は、はいと答え、私たち2人は、この22年間声をあげ続けてきました。

当時は、どこにも相手にされませんでした。マスコミの人からは、「興味はあります。でも少年犯罪の被害者のことを取り上げるのは難しい」と言われました。警察、家庭裁判所だけでなく、マスコミにも息子の命が軽く扱われたように感じて、とてもつらかったです。

同じ頃、私は同じ思いをしているお母さんと話がしたいと思い始めました。自分たち一家族では、受け止められない程のあまりにも大きな悲しみや苦しみに、夫婦間で攻め合うようになり、2人の兄弟をどう育てていけばいいのかも分からなくなっていたのです。このままでは、家族が壊れてしまうと思いました。

事件から1年後、ようやく3家族と知り合い、私たちを含めて4家族が大阪で集まりました。2日間かけ、必死になって話をしました。

「殺された子どものために何かしたい。私たちのように突然、被害に遭った人たちはどうしているのだろう。子どものお葬式の準備などしている人はいないはず。お金の援助は出来ないか、お葬式の時の手伝いだけでも出来ないか」。そんな思いから、私たちの会、少年犯罪被害当事者の会は始まったのです。

「こんなことで知り合いたくなかったね」がみんなの共通した言葉でした。

神戸の連続児童殺傷事件で少年事件の被害者に関心が集まった時期と重なり、学生さん達が、話を聞きに来てくれるようになりました。「武さんたちがしたいと思っていることを、自分たちに出来ることで手伝います」との言葉に後押しをされ、何の見本もない中、怖さも知らず、学生さんと手探りで、集い「Will」を始めたのです。1部では、子供たちの追悼をしながら事件紹介をし、2部ではディスカッションをしています。今年で20回目を迎えることができました。

会を作った時には、想像もしなかったつらい出来事も起こりました。会員が増え始めて10家族ほどに

なった頃です。ようやく会えた遺族たちが、一瞬で親戚以上に親しくなり、何もかも分かり合えたかのようにになりました。それでも、事件、地域、悲しみ、怒りの出し方等、みんな違います。その違いを責め、誹謗中傷の材料に使われるようになったのです。子どもを殺された親の思いは、似ていたはずなのに、なぜ同じ遺族に理解されないのかと思い、悩みました。もう、会など必要ないとまで思いました。

その一つの出来事は、私の息子の民事裁判一回目でのことでした。

裁判終了後、傍聴に来てくれていた学生さんたち、みんなで食事をしていた時、主人が涙をこらえながらこう言いました。「自分は、今日、胸ポケットに（息子がボーイスカウトで使い始めていた小さなナイフを）入れていたんだ」。私たち夫婦は、それまでも感情をすべてさらけ出していましたので、本当は、かたき討ちをしたい、そしてその気持ちを静めるために主人が部屋にこもって息子のナイフを研いでいることも話していましたが、本にも掲載されていましたので何も隠すものはありませんでした。主人の話聞いて学生さん達も応援に来てくれていた人も涙を流してくれて、私たち夫婦は共感してもらえたことに救われたのでした。

ところが、その時に同席していた遺族の人からこんな言葉が出たのです。「代表をしている武さんは、民事裁判の時にナイフを持って行っていた。そんな人が代表で良いのか」。それからの誹謗中傷はいつまでも止まることはありませんでした。誰もかばってはくれず、私は、弁解もせず、ただ耐えるしかありませんでした。誰も「そんなことを言っているのですか」と、言ってくれる人はいませんでした。

そんな時、私の気持ちを救ってくれたのが、会を作った時から私たちの世話人として関わってくれていたフリーライターの黒沼克史さん（故人）の存在でした。黒沼さんは、私たちの会の記録係として、さらに、みんなの相談役、民事裁判の時には一緒に調書を読んでくれ、陳述書の作成なども手伝ってくれていた人です。

その黒沼さんが言ってくれたのです。「武さんは、何も間違っただけはしていない。だからこれからも正しいと思うことを淡々とやっていったらいい。これからは自分は手伝うから」と。そう言ってもらえて、残った会の人達と一緒にまた、前を向くことが出来たのでした。

それまでは、会の規約を作るなど考えていなかったのですが、約束事は必要だと気付きました。私たちは少年犯罪で子どもを殺され悲しみ苦しみは似ているけれども、事件の背景や家族や地域との関係など、違うことはあります。みんな違っていていいと認め合うことを確認しあう必要がありました。人を認め合う。悪口を言わない。子どものころに教えられた、当然のようなことですが、その約束が、その時は必要だったのです。

そんな経験を経て、だんだん気付いてきたことがあります。当初は、遺族の人や周りの人に傷のなめ合いをして何になる、学生さんは単位をとるために手伝っているなどいろんなことを言われ、どんな言葉にも傷ついていました。それがたくさんの信頼できる人と出会い、変わっていきました。遺族が、傷のなめ合いをして、そこから前を向けたらいい、少しでも元気になってもらえたらいいと思えるようになったのです。学生さんも、もし単位が取れるのであれば、そんな会になれていること自体が嬉しいと思えたのです。

会を維持していかななくてはならないと思うあまり、変なところに力が入っており、なぜ、会を作ったかという本質的を見失っていたと気付いたのです。

私たち夫婦は会を作る前から決めていたことがありました。何もかもをオープンにすることです。なぜなら、私たち夫婦は、被害者感情がとても強く、加害者が憎くて許せない、かたき討ちをしたいという思いが、誰よりも強いのではないかと思っていました。だから、被害者だけで集まってしまうと間違った方向に行っても気付かない怖さがあると思っていました。会を作る時から、遺族のほかに応援して

くれている人や、マスコミの人たちがいました。今でも、お願いしているのは、「私たち遺族が、もし間違っただけを言っていたら、それはおかしいのではないですか、とちゃんと教えて下さい」ということです。

学生さんたちや支援してくれる人たちにも、「私たちは、遺族の集まりなので気を遣うのは分かります。もちろん、被害に遭った直後の人には、色々な配慮は必要ですが、ほかの人には、腫れものに触るように過剰に気を遣う必要はないです。もし、傷つくことやつらい思いをしたら、必ず私に言ってください。黙ったまま、関わってもらえなくなるのは悲しいですから」と言っています。

私たち、支援をしてもらって被害者も、学生や支援者を傷つけてはいけないと思うのです。遺族であっても何を言ってもいいわけではないのです。被害者である前に人として、やっぱりしてはいけないことはあり、言ってもいいことはないと思うからです。

今年6月、何よりもつらい出来事がありました。3年前に病気が見つかり、闘病中だった主人が亡くなりました。何もかも終わったと思いました。主人とともに、これまで2人3脚で頑張ってきたからです。

22年前、会の代表なんか出来ないと思っていた私は、「俺は特に出世欲、名誉欲が強いからダメだ。お前は、欲がないからちょうど良い。それに子供のことだから、お母さんが良い」と言われ、なぜか納得してしまったのです。資料やホームページの作成、少年法の読み込みなど、会務の影の仕事は、すべて主人がしてきました。私は、国の審議会やマスコミに対して話をする、会員への連絡をすること、すべて役割分担でした。

一人になり、そんな主人がいなくなった現実を受け止めることが出来ませんでした。しばらくは、何もできなくなってしまいました。

でも、今年はWILLが20回という記念の年でした。主人もそれに向けて治療を頑張り、今年は、こうしたらいいのではと話もしていました。会としても開催をやめるわけにはいかない。でも頭では分かっていても、力が出ない。どうしていいか分かりませんでした。

そんな時に、私の気持ちを後押ししてくれたのがWILLの学生さんたちと、卒業しても関わってくれている学生OBの人たちの存在でした。いつもの年よりたくさんの方が力を貸してくれることになったのです。何回もの準備会を重ねて、WILLが近づくにつれて学生さんの熱意が伝わってきて本当にありがたくてうれしかったです。今まで以上に感謝の思いでした。

いつも主人が言っていたことがありました。「自分たちは、子どもを救えなかった情けない親だ。だけど、WILLの学生さんたちは、すごい。自分たちから来てくれて、殺された子どもたちのために一生懸命に手伝ってくれる。本当にすごい」と。

だから今年のWILLは、1部は、いつも通りに子どもたちの追悼をしながら事件紹介をして、2部は、ゲストは置かずに会の人たちと、いつも黒子に徹してきた学生さんたちにも壇上に上がってもらいたい、一緒に話がしたいと思いました。同じことを願っていた主人がそこにはいないのは、とても辛いことでしたが、実現できて本当に良かったと思っています。

これまでに私たちの会では、主人の他に6人の仲間を失っています。平均寿命から言っても早すぎます。もちろん事件のせいだけとは言いませんが、大きな影響はあると感じています。もっと法律で守ってくれていたなら、制度が整っていたなら、あれほどの苦しさはなかったのではないかと思います。

22年間を振り返ると、少年法が4回改正され、犯罪被害者等基本法も出来ました。被害者への通知制度等、被害者が利用できる制度が増えました。でもまだまだ被害者の苦しみは、続いているのです。損

害賠償の未払い、少年院、少年刑務所から出所した後に被害者が抱える恐怖や不安、矯正教育への不信感、残された兄弟の支援など、たくさんの問題が残されています。長い間、苦しんでいる被害者の人たちがいることを忘れないで、少しでも早く、法律や制度の中にきちんと被害者のことを盛り込み守れるようにして頂きたいです。

私たちは、これからも声を出し続けなければいけないと思っています。私たちが忘れてはいけないのは、一番の被害者は、殺された子どもたちで、その子どもたちは、決して死にたくなかったことです。これからも、このことを真ん中において、焦らず、おごらず、感謝の気持ちを持って、自分たちに出来ることをひとつずつ頑張っていきたいと思います。

何よりも、今より、被害者に優しい社会になってほしいと願っています。